

グループ5

大日方委員 乾委員 二見委員 酒井教授 稲玉課長 清水次長（司会）

記録：藤森

ディスカッション1 グローバルの視点から

■ 大日方委員

- 海外での体験は、ホームステイをしながら、ある程度日数をかけて文化や生活に浸り、持参した課題について学び取ってきてほしい。
- 8月にある程度日数を確保して学んできてほしい。
- 南半球(NZ など)では季節が逆で、現地の学校が開いている可能性がある。

■ 乾委員

- 長野県内の義務教育に関わっている。
- 大学の海外研修のコーディネーターとして、業務を通じて様々な国に行く機会がある。
- シンガポールから接続。職業奉仕と関わり、情報提供やロータリーとして応援したい。
- 中学・高校生が海外を見据えて探究する例が多い。
- 英語を使いたいなら英語圏、県内企業とのタイアップなら東南アジア。
- シンガポール事務所でのインターンや多文化の話題も紹介。
- 地域選定は「何を目的として行くか」がポイント。

■ 二見委員

- 白鳥さんから紹介を受けて参加。DIE 小委員会所属。
- 青少年交換事業を実施(以前は 6 ヶ月、現在は 1 年間)。
- 高校 2 年の初めから終わりまで留学。帰国後は表情や思考が豊かになる。
- 2600 地区の交換は基準が厳しいが、乾さんと協力したい。
- 小 5 くらいになると将来を意識し始め、目的がある子は意見を主張できる。
- 中学生になるとさらに幅が広がり、発言力も高まる。

■ 稲玉課長

- 小学校 5 年生～中学校 2 年生が対象。海外・県内の両方で関われることを楽しみにしている。
- 地域性や対象国への関心あり。東南アジア地域は今後の成長が見込まれる。
- 長野県は製造業が盛んで、ベトナム・インドネシア・シンガポールに約 50 社が進出。
- 英語力について、ネイティブ並みか、同レベル同士での会話を検討。
- 発展国(シンガポール)、中間国(カンボジア)など、交流する学校のレベルも考慮。

■ 酒井先生

- 海外に行くことで多くの刺激を受ける。盛りだくさんの体験になる。
- 小中学生には、同世代の子どもたちとの出会いが重要。
- 企業訪問を通じて将来の自分を重ね合わせるようなモデルとの出会いを。
- 海外視察で完結するのではなく、問いやワクワクを持ち帰ることが次の意欲につながる。
- 小学生なら助けてもらいながらコミュニケーションする経験も大切。
- 失敗があっても良い。挑戦すること自体が価値。

■ 清水次長

- 東南アジアは時差が少なく、事前学習に有利。
- 6～8 月を一つの期間として設定しているが、アイデアを歓迎。
- 子ども自身が「どんなところを見たいか」を出してくると良い。
- 事前学習を通じて経験が深まる可能性あり。